

01・フードコートのいつもの席で、隠れてえっちないたずらされる（えっちな絵アカウン  
トがバレたので）

とある年の春。四月二十日、水曜日。十六時ごろ。

日本のとある、かなり寒い地域の政令指定都市。

天気は晴れ。気温は十五度。

地元民は『すっかり温かくなった』と感じているが、他の土地の人間は、あまりそうは  
思わないだろう。

そんな気温の、春の夕方である。

場所は、主人公が通う学校『公立 鵠（くぐい）』から徒歩で行けるところにあるショッ  
ピングモール『バアドモール 鵠中央店』の、Bタウン三階フードコート。

主人公は今、恋人の『桐生 七緒（きりゆう ななお）』を待ちながら、ここで作業をし  
ているのだ。

このフードコートは、公立 鵠の生徒達の憩いの場だ。

毎日放課後になると多数の生徒で溢れかえり、主人公もこれまで、幾度となくこの場所

を利用した。

そして七緒や友人たちと、楽しい時間を過ごして来たというわけだ。

だけど、今は一人。

主人公は『いつもの場所』と呼んでいる窓際四人掛けの席で、黙々と絵を描いている。

それは、メッセージアプリの絵文字として販売する予定の、色々な表情をしたアライグマの図案だ。

主人公は、アライグマが笑ったり、感激したり、眠そうにしたりするイラストをちまちまと描きながら……良さそうなものの脇に丸を付けたり、同じデザインにちよつとしたバリエーションを付けて、どちらがよりよいかを精査したりしている。

そうしながら、従業員用ロッカーに忘れ物を取りに行った七緒を待っているというわけだ。

このように主人公は、手を動かしつつ、脳はそれなりに暇だった。

なので、あたたかな春の日差しを頬に受けながら、七緒と出会ってから今日までの出来事を、しみじみと振り返ってみている。

あたかも少女漫画とか、少女向けアニメとかのオープニングのような一人称で。回想形式で、自分と七緒の事を、楽しく紹介している。

しかし、この行為に特に意味や理由はない。

オタクとは、えてしてそういう遊びをしたがるものだからだ。

という事で……七緒が来るまで、しばらく主人公の遊びに付き合おうとしよう。

——わたし、染谷（そめや）あんず。

『公立 鵜（くぐい）』に通う、三年生だ！

趣味はイラストを描く事と漫画を読む事、それからアニメとゲーム。

あと、最近は料理も頑張ってる。

所属してる部活は漫画研究部で、去年の十一月から、部長をやらせてもらってる。

学校の成績はまあまああってとこだけど……二年の頃とってた選択美術だけは結構褒めてもらえた。

つまりこんな感じで、とにかく絵を描く事が好き。

暇さえあれば今みたいに手を動かして、なんか作ろうとしてる。そういうやつなんだ。

そんな、オタク街道まっしぐら。

『このまま一生恋愛経験なしかも』と思われたわたしだったけど、半年前、ひよんな事がきっかけで、ものすごく可愛い彼女ができた。

十月のある日。わたしにはもったいなさすぎるほどの素敵な女の子が、突然わたしを『好きだ』って言うてくれたんだ。

その子は一見どんな事もサクサクこなしちゃう、すごく器用な子だ。頭もいいし、話してて楽しいし。

仕事もテキパキしてるから、バイト先でもめっちゃ頼りにされてる。

おまけに見た目もすごい可愛くて、もはや『鵠の奇跡』と言って差し支えない。

だからその子をよく知らない人は、彼女を『向かうとこ敵なし』とか『初期ステからぶっ壊れの最強キャラ』とか『もはや二次元』って評価してると思う。

だけど彼女は、ほんとは人に甘えたり、本音を打ち明けたりってのがすごく苦手で。

どう見てもかんぺき系女子なのに、実は自分に全然自信がなくて。

いつも自分の事をダメな奴って思い込んで、自分を傷つけてるっていう……。

本当は、すげえ不器用な女の子だったんだ。

だからわたしは、彼女のそういう弱い所や、一人で頑張るすぎちゃう所を知るうちに、どんどん好きになっちゃって。

今じゃもう、完全にめろめろ。

毎日その子の為に、色々頑張ってるって訳なんだ！

……ていうかみなさん、その辺はもうご存知でしたよね。

だってこれっていわゆる……『これまでのおはなし』ってやつですから……えへへへ。

あっ。でも、みなさんがまだご存知ない事も、実はたくさんあるんです。

具体的には、わたしと彼女が正式にお付き合いを始めてから今日までの、半年間の事！だからお伝えしますね。

わたしの恋人の『桐生』……改め、『なー』と交際を始めてからの半年間の主なトピックは、こんな感じです！

■お付き合いをきっかけに『桐生』から『なー』って呼ぶようになりました

■例の『地下駐車場待ち伏せ事件』の翌日。つまり付き合い始めた翌日に、なーのお店のパートさん達にお付き合いバレしました。あの後、田中さん呼びに行く時に手繋いでるところを他のパートさんに見られちゃったみたいです。なので付き合いって即、バアドモール公認カップルになりました

■パートさん達はみんな知ってるのに学校みんなが知らないのも変だなんて思って、友達や漫研のみんなにも、すぐに付き合い合ってる事を言いました。わたし達が仲いい事はとくに知られてたので、話早かったです。という事で、交際三日目にして友達と部活公認のカップルにもなりました

■それから、なーのお母さんが退院して少し経ってから、桐生家にご挨拶に行きました。

その後すぐにうちにも来てもらって、晴れて親公認カップルにもなりました。あとついでに、前に『すうの家に泊まる』って言って本当はなーの家に泊まった事も、お母さんにちやんと白状して謝りました

■こんな経緯で、わたしとなーの関係は、速攻でお互いの身内全公認となりました。なので、桐生、久我、染谷、田中の四家は、冬のあいだに交流会しまくって、ますます仲良くなりました。特にすうんちで合同鍋会とかやった時は、田中さんの旦那さんと息子さんもお会いしました

■この四家の交流が始まった事で、これまで『いつ遊んでんの？ ていうか寝てんの？』と言われ続けていたなーの生活環境が改善されました。みんなで協力して、なーの負担を減らす事になったんです。具体的には、なーのお母さんが夜仕事の日には、なーはバイト後、家には帰らずに田中さんにうちかすうの家に送ってもらって。ご飯食べて、そのまま泊まってもらう事になりました。逆に、週に一回わたしがなーの所へ行って、ご飯作ってあげて泊まる日も作りました。料理頑張るようになったのって、つまりはそういう事なんです。えへ。あと、田中さんは今でも遊園地の件を申し訳なく思ってくれてるのか『どこでも全部送り迎えするから』って言うてくれて、さすがにもちろん全部はお願いしてないんですけど、田中さんがそのほかの事でもフットワーク軽く色々手伝ってくれるお陰で、四家のお母さん同士もすげえ仲良くなりました

■美津子おばあちゃんとも、その後また偶然会えたので、なーのお母さんが無事退院した

事を報告しました。あと美津子おばあちゃんち、実は割とうちの近所だったみたいで、今でも時々道やお店で会ってはちよつとお話する関係になりました。なーという時にも会ったんですけど、美津子おばあちゃんちはちよつと天然なので、わたし達の関係の事は、わかってるのか、わかってないのか？　って感じです

■こんな風にほのぼのお付き合いライフが定着してきた冬のある日、わたしがなーの為に作ったメッセ用のスタンプ『アライグマのあーちゃん』シリーズがちよつと売れました。

『身内しか買わんだろ』と思ったら、アライグマモチーフのバッチャルヨーチューバー『荒井 ねね』さんが紹介してくれて、局地的に有名になったんです。これがきっかけで、主にねねさんファンに買ってもらえるようになりました。なお、身内は本当にみんなダウンロードしてくれたみたいで、特になーのお店のパートさんたちのグループメッセは、あーちゃんだらけだそうです

■この件でちよつと自信がついたのもあって、年明けからコミッションサイトで絵の仕事、いわゆる有償依頼ってやつを始めました。オリジナル絵限定なんですけど、わたしがSNSで描いてるむーちゃん絵を見たのがきっかけの方とか、ねねさんきっかけの方とかから、ちよつとずつ依頼もらえるようになってきてます。今のところ一番大きい仕事は、ねねさんのASMR動画用のイラストです。将来的には、憧れの漫画家・松雪ほたるさんみたいになりたいなあって思いながら、頑張ってます

■付き合って百日目位の、二月のすごく寒い日に、なーと初えっちしました。一生の思い

出です。最高に幸せでした……♡

■四月上旬、二週間前の『週アル』本誌で、半年近く行方不明だったわたしの推し、むーちゃんがついに帰ってきました！　すごい元気でした！　なので今は祝い絵描きまくってます！

■こんな感じで、なーとはめちやめちや順調ですし、推しも元気ですし、イラストレーター的にも一歩踏み出せました。うへへへへ。頑張ります

### 〈主人公〉

「へへ。えへへへへ……」

主人公、この半年分の出来事を一通り回想したところで、一人二へ二へと微笑む。

七緒と交際を始めてから実に色々な事があったが、どれも幸せな思い出ばかりだ。

特に、交際前からの懸念事項である『七緒忙しすぎ問題』に着手し、身内一同力を合わせて改善に踏み切れた事は本当に良かった。

結果論ではあるが……これは、早期にパートさん達に二人の関係を知られた事が大きい。

この事がきっかけで、二人は親しい人々全員に関係を打ち明ける事を決意したし、そうした結果、格段に動きやすく、周囲との連携もとりやすくなったからだ。

という事で今の主人公と七緒は、ちよつと珍しい位、周囲に応援されまくっているカツ



ブルだ。

当初は『女の子同士という事をなかなか理解してもらえず、大人の反対を受けたらどうしよう……』と思う事もあった。

だが、性別の件など誰も気にしないほど、七緒の『いつ遊んでんの？　ていうか寝てんの？』問題は深刻だった。

また、七緒を知る誰もが『なーちゃんマジで異性と恋愛する気がない』事を理解していた。

そこに『なーちゃんをクレーマーから助けた学校の先輩（兼、なーちゃんのスマホを拾って届けてくれた先輩）』が現れて。

『七緒さんとお付き合いしています。

七緒さんのために、力を尽くしたいです。

……良かったら応援して下さい！』

と言ったら……。

七緒の関係者が皆『よし。この子で手を打とう。強めに応援しよう』という雰囲気になったのも、自然な展開だったといえるだろう。  
だから、主人公は思う。

……とまあ、こんな感じで、本当に今、わたしすっごく幸せなんです。

仮に。仮にもし問題があるとしても、それは本当に些細な事。

たとえば、身内でわたしが描いたスタンプが流行した事で、イラストを投稿してるSNアカウントが、田中さんはじめとするバアドモールのおばさん達にまで知られてしまった事とか。

その結果、肌色多めの絵や、自分の性癖に関する投稿は、ちよつとできなくなっちゃった事位です。

……でも、大丈夫です！

この件についても、実はほぼ解決済み。

実は半月位前、つまりむーちゃん復活の日から、アダルトめの絵やつぶやきを投稿するアカウントを、こっそり新しく作って運用し始めたんです！

だから、今はそっちでむーちゃんの新装備絵（公式だけど肌色が多すぎる）とか、むーちゃんの微エロ絵とか、性癖全開のオリジナルえっち漫画とか、習作イラストを投稿しています。

こっちに知り合いはいないけど、だんだん見てくれる人が増えてるんですよ！

だけど、身内といえど『えっち絵用のアカウント作りました』と報告するのはなんか気が引けちゃって……。

実はまだ、なーにもすうにも話してないんですよ。

『これ、いつ言おっかなあ？』っていうのが、現在の悩みとえば悩み……って感じですよ！

【※音声ここから※】

SE1 フードコート環境音

【最初から最後まで流す】

【繰り返し流す】

【0―5秒ほど流してSE2】

【その後、音量が小さくなる】

【トラック終了まで流し続ける】

SE2 主人公が紙にイラストを描く音

【最初から最後まで流す】

主人公、このように少女漫画のモノログ風にこれまでの出来事を回想しながら、淡々と手を動かす。

すっかりイラスト制作と回想ごっこに夢中になっているのである。

なので、すでに誰かが隣に座っており、こっそり主人公の作業を見つめている事には、まったく気付いていない。

だから、主人公は引き続き語る。

とにかく今は、少しでもたくさん絵を描いて、技術向上や、お仕事につなげていきたいと思っています。

いつも頑張ってる、なーの恋人にふさわしい女性になるためにも。

最低限デート代とかプレゼント代は、自分で稼いだお金から出していききたいですからね。なー。わたし、頑張るからな。

こうやって少しずつイラストレーターとして身を立てて、将来、必ずなーをお嫁さんにもらうからな……！

と、そのお嫁さん候補がすぐそばにいる事にも気づかず、アライグマを描いている。そうしてそのまま、さらに二分ほど経過した頃……。

### ● 右 3センチ

「くすくす笑いながら、にやにやと、嬉しそうに主人公を呼ぶ。

フードコートの二人掛けの椅子に腰かけ、主人公のすぐ隣にいる。

七緒は、数分前にこの席に到着し、ずっと座っていた。

であるにもかかわらず、主人公がまったく気付かず、ひたすら作業に熱中していた事が面白く、また、可愛くてたまらない。

なので、本当はもう少しこのままで居ようかとも思ったが……今日は珍しく七緒のアルバイト休みの日。

これから七緒の自宅で、二人ゆっくり過ごす予定である。

それでもここに居続けるのは、さすがに時間がもったいない。

なので、『そろそろいいかな』というタイミングで声をかける』  
せーんばい」

と、唐突に話しかけられた。

〈主人公〉

「ぴゃあ！」

驚いた主人公は、椅子に座ったままビヨンとジャンプする。

それから慌てて、声のした方向……七緒の居る方に向き直った。

これによって声の方向は『右』から『正面』になる。

● 正面 15センチ

「きゃっきゃと嬉しそうに、正面から主人公を見つめてにやにやと。

主人公が期待通りのリアクションをしてくれたので」

あはっ♡ すごいびっくりしてる♡」

〈主人公〉

「なー！ い！ い！ い！ いっからいたんだ!!」

主人公、まるで『押さえてないと物理的に心臓が飛び出す』と言わんばかりに両手で胸の真ん中を覆うと、心臓をバクバクさせつつも、すぐに身体を戻して七緒のすぐそばに収まる。

交際前の主人公なら、こんな時、驚きすぎて思いっきり距離を取っていた事だろう。でも、今は違う。

今の二人は、沢山の時間を一緒に過ごして、恋人同士の色々な事も経験したラブラブカップルなのだ。

当然、パーソナルスペースにお互いが思いっきり入り込んでいても、少しも気にならない。それどころか、この方がよりしつくりくる気がする。

逆に言えば、だからこそすぐに気づかなかったともいえるだろう。

● 正面 15センチ

「『すぐ嬉しそうに、正面から主人公を見つめてにやにやと。

主人公が期待通りのリアクションをしてくれたので」

えく？ ずっと居ましたよ？」

〈主人公〉

「ぐ、具体的に、は……？」

だから、主人公が今心配する事があるとしたら。それは、七緒の到着時間と待機時間だ。

この通り主人公は、集中すると周りが見えなくなってしまう。

当然、時計もずっと確認していない。

だから、

あわわわわ……。

も、も、もしかすると、三十分とか、一時間とか待たせちゃったんじゃないか……？  
今日はせつかなーの休みで、これからーんちでいちゃいちゃする予定だったのに！  
と、慌てているのだ。

●正面 15センチ

「さらっと質問に答える。

できるだけ何でもなし事のように言って、主人公の申し訳ない気持ちを軽減させたいの  
で」

ん。五分位前から？」

しかし、事態はさほど深刻ではないようだ。

七緒はけろりと答えると、スマホを取り出し、その画面を見せて時間を知らせてくれる。  
時刻は十六時十八分。

『ここで待ってて下さい』と言われて一度別れたのがちょうど十六時だった。

これなら確かに、あまり『待たせた』のうちには入らなさそうである。

ちなみに七緒のロック画面は、以前主人公が描いてプレゼントした、七緒の推しキャラ  
クター『鏡（かがみ） セーラ』のイラストだ。



ちなみにスマホケースも一見おしやれだが、実はこれも『セーラちゃんのスマホケース』という公式オタクグッズである。

主人公の恋人は、堂々としたオタクなのだった。

〈主人公〉

「わわわ！ マジか！

ごめん。全然気づいてなかった……！」

……話がそれた。

とにかくこれで、さほど七緒を待たせずに済んだ事はわかった。

それでも、主人公は申し訳ない。

こうなるのは、すでに一度や二度ではない。

その上、毎回深く反省して、自分なりに対策しているのにもかかわらず……いまだ改善に至っていないからだ。

● 正面 15センチ

「【嬉しそうに、正面から主人公を見つめてにやにやと。  
慌てふためく主人公が可愛いので。」

全く怒っていない。

七緒は主人公の、絵を描き始めると集中しすぎてしまうととても大好きなので。

『別世界行っちゃう』とは『近くにいても、まるで別世界にいるかのように、まったくこちらのアクションに気づかないほど集中している』という意味」

あは♥ やっぱり気づいてなかったんですね。

先輩って、集中するとほんと別世界行っちゃいますもんね♥」

〈主人公〉

「うう……。ほんとにごめんな。

そうなんだよ。わたしってほんと、絵描いてるとつい周りが見えなくなっちゃうっていうか……」

だけど、七緒はまったく気にしていないようだ。

前々から思っていた事だが、主人公の恋人は、主人公にとことん甘い。

主人公がどんなミスやマヌケなしくじりをして、いつも優しく笑って受け止めてくれるのだ。

だから主人公はいつも、

はあ……。なー、優しい……。しゆき。だいぢゆき……。

と、ぼーっと胸が一杯になってしまふのである。

●正面 15センチ

「嬉しそうに、正面から主人公を見つめてにやにやと。全く怒っていない。

七緒は主人公の、絵を描き始めると集中しすぎてしまふところも大好きなので」  
ふふ。大丈夫ですよ♥

私、絵描いてる先輩見てるの大好きですから。

【自然に話題を変え、謝る。

これ以上主人公に謝らせたくないし、そもそも、こうなったのは自分が主人公を待たせ  
たからなので」

私こそ、お待たせしちやってごめんなさい」

〈主人公〉

「あ！ そうだ！ 時計あったか？」

だがそんな、ぼんやりが服を着ているような主人公でも、ようやく今日ここに來た理由を思い出す。

自分達は今日、七緒の時計を探しにやってきたのだ。

●正面 15センチ

「『穏やかに嬉しそうに。即座に自分の事を心配してくれる主人公がいておいしいので。腕時計を見せながら話している』

はい。やっぱり時計、ロッカーの中になりました。

この度はお騒がせしました♥」

〈主人公〉

「あー！ やっぱりかあ。あって良かったな！

ずっと使ってる大事な奴だもんな！

……あ。じゃあ、そろそろ行くか？

せっかくの休みなんだし。なーも早く家に帰って休みたいだろ」

主人公、ホッと胸を撫でおろすと、手をグーにして振りながら七緒に提案する。

ところで『アライグマのあーちゃん』は、主人公がアライグマに似ている事から生まれた。

具体的にはこの、何をするにも手が上がったり下がったり。

顔に当たったり胸に当たったり、閉じたり開いたり。広げたり縮こまったりと、何かと手の仕草に落ち着きがなく。要するに『手がうるさい』事から『なんだかアライグマっぽい』と言われるようになったのだった。

## ●正面 15センチ

「【落ち着いて。

『特に自分は急いでいないので、主人公の裁量に任せる』事を伝える。

もし主人公の作業が順調なら、ここで無理に止めるのは申し訳ないので」  
あ。いいですよ。

せっかく作業されてたんですし、キリいいとこまで進めて下さい。

【主人公が今描いていたイラストについて尋ねる。

紙に描かれているのは『アライグマのあーちゃん』の絵なので、おそらく新作スタンプか絵文字だろうと思う。

だが、そのどちらであるかまでは判別がつかないので」

何（なん）の絵描かれてたんですか？」

〈主人公〉

「えっとな。今度出す絵文字の図案考えてた！」

主人公、一度机に向き直ると、イラストを描いていた紙を七緒に渡す。

これによって、顔を動かしていない七緒は、そのまま主人公の右耳に話しかける形になる。

声の方向が『正面』から『右』になる。

SE 3 主人公がイラストを描いた紙を七緒に差し出す音

【最初から最後まで流す】

● 右 15センチ

「[とてもテンションが上がり、嬉しそうに。

『頭部だけのイラストばかりなので、もしかすると絵文字なのではないか』という予想が当たったので」

お？」

〈主人公〉

「こんな感じ。普段よく使ってる絵文字を参考にしつつ。

みなさんからリクエストがあったやつを、重点的に揃えてみました」

七緒、興奮して距離が近づく。

● 右 3センチ

「【とてもテンションが上がり、嬉しそうに。

主人公が見せてくれた新作イラストが、とてもハイクオリティかつ自分好みなので。

また、先日自分がリクエストした絵文字を、主人公が律義に全部考えていてくれたので。

そして、照れつつも得意げにイラストを見せてくれた主人公がとても可愛らしいので」

※大きい声になりすぎないようにお願いします

えっ。めっちゃ良（い）いー！

私がお願ひした奴全部あるー！

【嬉しそうに。

主人公がこれまで販売したメッセージアプリ用のスタンプについて語る。

それらはどれも好評で、周囲の人間は『主人公が描いたから』というひいき目は多少あ

りつつも、みんな気に入って使っているのだ。

その例として、由希乃の存在とその使用頻度の高さをあげる」

先輩の作るスタンプ、皆（みんな）名作すぎ。

田中さんとか押しまくってますよ」

〈主人公〉

「えへへへ……。

割と作業順調だからさ、この感じなら、今月末には申請できると思う」

主人公、胸の前で自分の指先同士をくっつけると、五組すべてをつんつんと合わせ、照れたポーズをとる。

無意識のリアクションなのだが、やはりちよっと手がうるさい。

● 右 3センチ

「【とてもテンションが上がり、嬉しそうに。予想以上に早く絵文字が仕上がりそうなので】※大きい声になりすぎないようにお願いします

えっ。じゃあ来月には使えそうなんですか？

わー。楽しみです♡」



七緒、興奮してさらに近づく。

● 右 0センチ

「あまあまに。」

主人公は何も言わない。だが、本当は『スタンプに続いて、今度は絵文字が欲しい』と言った七緒のために急ピッチで作業してくれている事を、七緒は薄々理解しているので「流石（さすが）先輩」

七緒、右耳にささやく。

★ 右 ささやき 0センチ ※マークのセリフまでささやく

「ひそひそと、あまあまにささやく」

だーい好き♡ ※

〈主人公〉

「……………」

七緒、少し離れて、主人公の顔を正面から見て話す。

● 右 15センチ

「「ちよつとコミカルに。『キリッ』とふざけて、うやうやしく。

まるで『大作家先生と、先生の作品を隣で待つ編集者』のような感じで」  
じゃあ、私は描くとこ見てるんで。どうぞ続きして下さい」

〈主人公〉

「あっ………♡

でも、今日は案出しだけにしとこうと思ってたから大丈夫だよ」

主人公、耳元で『流石』『大好き』などの甘い言葉をささやかれ、再び

はわわ………。

なーのあまあまボイス、最高………。

中身がよくて顔もよくて。スタイルも良ければ声も覇権の恋人、やば………。  
SSRなんてもんじゃないよ………。

と、脳が溶けそうになるも、慌てて己の意見を伝える。

そう、七緒と来たら、最近えらくASMR的な事に力を入れているのだ。

確かに以前から『やたら近い距離感で話す』傾向はあった。

だがこのところはそれに加えて、こんな風に距離に緩急をつけて話したり、不意にあま  
あまに囁いてきたり、キスしてきたり……舐めてきたり。

そのようにして主人公の耳を、めちやくちやに惑わせにきている気がする。

それは、自分の声がえらく良いと、ようやく自覚したからなのかも知れない。

あるいは先日、アニメ版でむーちゃん役を演じている声優さんが音声作品を出し、それ  
にすっかり夢中な主人公を見て、自分も色々試してみたくなったのかもしれない。

とにかく主人公は、七緒のこの『ASMR攻撃』にめっぽう弱い。

ただすぐそばで七緒が話しているだけなのに……じゅわっと、身体の芯が熱く湿って  
く  
るような感覚に襲われてしまう。

ありていに言えば……。

ちよつと。

ちよつとだけいやらしい気分になってきた……。

〈主人公〉

「と、という事で。今日はこの位にしとくから。行こうぜ？」

だから主人公は、内心どきまぎしつつ『早く桐生家でゆっくりしよう』と、積極的に促す。

絵の仕事は大切だが、七緒と過ごす時間はもっと大切だ。

それに、たった今のこれで、色々とスイツチが入りかけている。

一刻も早く七緒の部屋に行って、いちやいちやしたくなってきたのである。

● 右 15センチ

「『きょんとんとして。』

だが実際は、自分が耳元でひそひそ話したあたりから、主人公が何だか足のあいだをもぞもぞさせて、恥ずかしそうにしているのに気づいている」

あ、そうですか？」

〈主人公〉

「……うん！ 残りは明日やるよ」

そんな主人公に、七緒が再び近づく。

七緒は、主人公の興奮をすでに見抜いている。

●右 3センチ

「『かなり近づきつつ、まるで『右15センチから全く動いていない』かのように、しれつと続ける。」

主人公がそれだけで『びくっ』と身体を震わせた事には気づいている」  
なら、ここ出る前に、先輩にお聞きしたい事があつたんです」

〈主人公〉

「……！ ……うん！ ……なんだ？」

七緒、主人公の右耳に唇を近づけたまま、スマホを取り出して続ける。

●右 3センチ

「『しれつと切り出す』

この作家さんの、このイラストなんですけど。ちょっと見てほしいんです」

〈主人公〉

「？ うん。いいぞ。見せて見せて」

？ 何だろう。『このイラストで使われてる技法って何ですか？』的な質問かな？

主人公、きよんとしつつ、また、両足を落ち着きなくふらふらさせながら答える。  
うるさいのは手だけのはずだったのだが、七緒がこんな風にむやみやたらに近くで話しかけて来るから、足までうるさくなってしまったのだ。

● 右 3センチ

「【穏やかに落ち着いて】  
ありがとうございます。」

『『キャプション』』と言いたいが、その言葉が出てこない。

なので、近い意味合いの言葉『一言』『紹介文』で代用しようとする」  
えっとですね。この。

何（なん）て言うんでしたっけ。  
イラストについて。一言？ 紹介文？」

〈主人公〉

「キャプション？」

主人公、七緒が言わんとするところを推測して答える。  
すると七緒が、興奮して、さらに近づく。

● 右 0センチ

「テンションが上がる。

主人公に答えを教えてもらえたので、頭のもやが晴れた気分。

また、すぐに正しい答えを導き出してくれる、知的な主人公の事を『さすが先輩  
き♥』と思っている」  
好

そう♥ キャプション！

キャプションをちよつと読んでほしいんです。

【主人公に自分のスマホを手渡す】  
はい。どうぞ」

〈主人公〉

「ん？ わかった。えーつと」

かくして主人公は、言われるままに応じ、スマホを受け取った。

その頭の大半は『早くなーんち行っていちやいちゃしたい。あわよくば、なーのお母さんが帰ってくる七時ごろまでに、めっちゃえっちな事がしたい』という事で占められており、まるでまともな思考ができていない。

だから主人公は、すっかり忘れていた。

自分の新アカウントは、最近ちよつとえっちなむーちゃん絵を投稿しまくった事によりプチバズを繰り返しており、フォロワー増加中な事。

つまり、むーちゃんの正式名称『六車（むぐるま） あゆむ』でパブリックサーチすれば『話題の投稿』として、すぐに出てくる存在になっている。という事を。

〈主人公〉

「……！」

それだけではない。

そのアカウントにはむーちゃん以外のイラストも載せており、中には、七緒を意識して描いたオリジナルイラストもある事も、主人公は失念していた。

しかし、直接『その画面』を見せられたのなら、話は別だ。

今まさにそうされた主人公は、



—— あっ。

……しまった……。

と凍り付き……。そのまま、言葉を失った。

七緒、主人公の横顔を、ちらりと覗き見る。  
これによって、少しだけ離れる。

● 右 3センチ

「〔にやにやと嬉しそうに。〕

主人公が画面を見て、露骨にフリーズしているのが可愛くて仕方ないので」  
あ。わかつちやいました？」

その絵は、アカウント内の他のイラストとは違い、安心の健全絵だ。

七緒っぽい女の子を、色々なポーズ、表情、角度で描いているだけの、モノクロの練習っぽい絵だ。先ほと言った『習作』の一つである。

また、七緒っぽいと言っても『釣り目の、一癖ありそうな雰囲気』の、十代後半の美少女』という点が同じなだけだ。

だから知り合いが見ても『もしかするとこの絵は、七緒を参考に行っているのかもしれない』と思う程度の作品である。

髪形や身体的特徴はきちんと変えているし、そこに主人公の絵柄によるアレンジも加わり、まず特定はできないようになっていいる。

なので、はたから見れば、特にまずいイラストではない。

たとえ涼羽が見たって『ああ。先輩は本当になーちゃんが好きなんですわね……』で終わる事だろう。

だが、当の七緒に見つかり、ものすごく恥ずかしいイラストではあった。

その理由は――……。

### ● 右 3センチ

「「にやにやと嬉しそうに。」

自分の推理を述べる。

主人公が画面を見て、露骨にフリーズしているのが可愛くて仕方ないので「これ。アカウント違いますけど。先輩の絵ですよね？」

「少し間をあけてから。」

『それでー』の略」  
でー。

「スマホの画面を指さして。

疑問形ではあるが、答えを確信している。

『このイラストに描かれているのは、私ではありませんか？』と、完全に確信した上で質問している」

描いてあるのって、もしかして私？　ですよね♡」

〈主人公〉

「……あ、あ、あ。

え、え、え、えーっと。

なっ、七緒さんはどちらでこのイラストを……？」

主人公、もはやキャプションを読むどころではなくなり、どもりまくりながら、質問に質問で返す。

だが、問題はそのキャプションにあった。

イラストに添えた短い言葉に、主人公の恥ずかしい本音が詰まっているからだ。

● 右 3センチ

「しれっと、嬉しそうに、このアカウントを知った経緯を説明する。

主人公が状況を理解できず、完全に固まっているので。

『六車あゆむ』は主人公の推しキャラクター『むーちゃん』の正式名称。

『パブサ』は『パブリックサーチ』の略」

あーごめんなさい。

昨日『六車（むぐるま）あゆむ』でパブサしてたら、

【画面を切り替えて、同じアカウントに投稿された、別のイラストを見せながら】  
こっちの。この絵が出てきたんですよ。

で『え？ これ先輩の絵に似てない？』と思って他のも見たら、完全一致なんですもん。  
だから確認したかったんです。

【『むーちゃん』とは『六車あゆむ』の愛称】

先輩と絵がそっくりな、むーちゃん推しの、私っぽい女の子も描いちゃう人。  
そんなの先輩しかありえないですもんね♥」

〈主人公〉

「あのっ。あのっ。あの……。この件につきましては、ほんと、その……」

主人公、七緒と目も合わせられず、ほっぺたを両手で覆う。

そして、真っ青になったかと思えば真っ赤になって。

言い訳の言葉も出ずに、

終わった。なーに、なーっぽい女の子の絵を見られちゃった。

終わった……。

ああ。終わった……。

と、頭の中で、壊れた機械のように繰り返す。

こんな事になるなら『誰も自分の事知らないアカウントって、なーんかのびのびできていいなあ!』などと思わずに、アカウント開設時に素直に理由を説明して。

『これからえっち絵はこっちに載せるから、教えとくな』と、七緒や涼羽にURLを送ればよかった。

『なーみたいなのを描いた。しかも、我ながらメツチャ可愛く描けた。誰かに見せたいけど、本人に見せるのは恥ずかしい。でも、投稿しないのはもったいない。だから、こっちのアカウントでこっそり載せとこ』なんて思わずに『なーっぽい女の子を描いた! 見て!』と、本人に正直に言えばよかった。

でも、主人公はちよっと『匂わせ』がしたかったのだ。

『恋人に微妙に似ているイラストを描いて、知り合いのフォロワーがいないアカウントに投稿する』などという『果たしてそれは匂わせなのか?』という程度の、ずいぶんと腰の引けた匂わせをして。

自分の恋人が死ぬほど可愛い事を、全世界に発信したつもりになって。

一人ニヤニヤしたかったのだ。

しかしその強欲さが、この恥ずかしすぎる結果を招いてしまった。

恥ずかしい……あまりにも恥ずかしい。

対する七緒は、主人公の顔を覗き込む。

すっかり顔を真っ白にして、自分と目も合わせられずにいる主人公を、じいっと見つめる。

すると、主人公が向き直った。

これによって声の方向が『右』から『正面』になる。

## ● 正面 15センチ

「いつものトーンで穏やかに。

全く怒っていない。こうなった経緯は、想像に易いので。

であるにもかかわらず、主人公がものすごく申し訳なさそうにして、さっきから真っ青になったり真っ赤になったり、言い訳の言葉さえ失ったりしているので『可愛いなあ』と  
思っている。

なのでひとまず、自分の推察を述べる」

ううん。大体経緯（いきさつ）はわかりますよ。

『『アカウント』とは『主人公が普段イラストや日常について投稿しているSNSアカウント』という意味』

うちのパートさん達、先輩の事好きすぎて、先輩が絵描いてる事どころか、アカウントまで知ってるし。

『『むーちゃん』は、デザインからしてセクシーで肌の露出が多い。』

そのため、公式に忠実に描くだけでも、なんだかえっちな印象になってしまう』という  
意味で言っている」

でも、むーちゃんってセクシー担当だから、素で露出多いですし。

『『むーちゃん絵』は『むーちゃんのイラスト』。』

『えっち絵』は『アダルトなイラスト』という意味。

『アカ』は、以降すべて『アカウント』の略」

だから先輩は『むーちゃん絵やえっち絵は、パートさん達も知ってるアカには載せない  
方がいいな』って思って、新しいアカ作っただすよね？

で。そうするうちにフオロワー増えて。

『この絵』とは『七緒をモデルにした女性の絵』の事。

『健全絵』は『誰が見ても問題ない、全年齢対象のイラスト』という意味。

『新アカ』は『新しいアカウント』の略

この絵みたいなのは健全絵も、新（しん）アカにあげるようになってしまったと。

【にやにやと嬉しそうに。正解であると確信しているのだ。

『私はこんなに主人公の事を理解しているんですよ』とアピールしたい」  
当たり前でしょ？」

〈主人公〉

「はい……。すべて、なー様のおっしゃる通りです……」

……ん？

あれ？ あれ？ あれ？

……なー、怒ってないのか？

……なんで？

主人公、ガタガタと震えながら、ブルブルと混乱しながら、裁きの時を待つ。



しかし、なぜかはよくわからないが、七緒はどうやら怒っていないようだ。だが、もし逆の立場だったら、主人公は何となく淋しい気持ちになっていただろう。『なんで教えてくれなかったんだろう。わたしとなーの仲なのに』と、なんだかシユンとした事だろう。

だから、その一点のみにおいても、七緒は怒ったり拗ねたりしていいし、逆に主人公は猛省、猛謝罪しなくてはならないと思うのだが……。

## ●正面 15センチ

「いつものトーンで穏やかに。

過去形なので、全く淋しがっていない。淋しさを払拭する出来事があったので。

『見てない絵』とは『自分がこれまで存在を知らなかった主人公の絵』という意味だからね。

最初は彼女として、先輩のファンとして、ちよつと淋しかったっていうか。

『見てない絵こんなにあったんだ!』って、ちよつとシヨックではあったんですけど」

そう思っていると、早速その点について言及があった。

これによって主人公の胸はチクチクと痛むが、まだ話には続きがあるようだ。

●正面 15センチ

「嬉しそうに。特に『いいかな♥』の部分を楽しそうに強調して。

それ位心弾む事が、キャプションには書かれていたので」

このキャプション見たら『いいかな♥』って♥  
だって」

七緒、近づく。

主人公の右耳に唇を寄せて、ささやく。

これによって声の方向が『正面』から『右』になる。

★右 ささやき 0センチ ※マークのセリフまでささやく

「『ひそひそと。』

少し恥ずかしそうに。でも嬉しくてたまらない様子で、あまあまにささやく。

スマホの画面を最初のものに戻して、主人公の画面を見せながら、すでに暗記済みのキャプションの文言を読み上げている」

『好みのタイプの女の子描きました』って書いてくれたから♥」※

〈主人公〉

「……！」

七緒、そのまま主人公の右耳にキスする。

● 右 0センチ

「右耳に軽くキスする。

嬉しくて、勢い余っている」

ちゅ♡

「少し間をあけてから。

少し照れた、でもすごく嬉しそうな様子で」

ありがとうございます♡

すごい嬉しかったです」

七緒、主人公の右耳に唇を寄せて、ささやく。

★ 右 ささやき 0センチ ※マークのセリフまでささやく

「ひそひそと。

少し恥ずかしそうに。でも嬉しくてたまらない様子で、あまあまにささやく」

先輩。だーい好き♥※

〈主人公〉

「はわわわわ……」

やば……やば……やば……♥

主人公、七緒の甘いささやきに、いよいよ昇天しそうになる。

つま先にぎゅっと力を入れてなんとかこの世にとどまったが、鼓動はますます早くなり、もはやいやらしい事しか考えられなくなりそうだ。

だが、それはいけない。

主人公はまだ謝罪らしい謝罪を済ませていないし、第一ここはフードコートなのだ。

七緒とだけじゃなくて、涼羽や由希乃、美津子とも過ごして来た……超の付く『思い出の、公共の場所』なのだ。

とにかく、とにかく、まず……！！

謝らないと！

なので主人公は、七緒に向き直り真剣に謝る。  
これによって声の方向が『右』から『正面』になる。

〈主人公〉

「……ありがとう。喜んでくれて嬉しいよ！

……でも、やっぱりよくなかったよな。

自分なりに、なーがモデルだとはわからないようにアレンジしたつもりだけど。  
やっぱり見る人が見たらわかつちやうし。

そもそも、無許可で描くのはダメだよな。

アカウントの事隠してただけじゃなく、なーっぽい子のイラストまで描いて。  
こんな事して、本当にごめん」

主人公、ここで一度深々と頭を下げたのち、『イラストは消すから……』と続けようと口を開く。

しかし、七緒は本当に気にしていないようだ。

それどころか少し慌てた様子で、頭を上げるよう促してくる。

七緒、自分も少し姿勢を低くして、主人公と目線を合わせる。

それから、主人公の両手首を握って自分の方を向かせ、優しく諭すように話し始める。

●正面 15センチ

「穏やかに優しく。」

このイラストについて、七緒は何の問題視もしていない事と、その根拠を述べる。  
「というか七緒は『些細な秘密についてしつこく責める』なんて、かつて秘密主義で知れた自分ができる事ではとてもない。と、思っているの。」

え？ 謝る事ないですってば。

「アカウントの存在を隠していた事について言っている」

単に言う機会がなかっただけでしょ？

「『七緒っぽいと言えば七緒っぽい女性のイラスト』について言っている」

この絵だってほくろとか髪型とか、私とは大分（たいぶ）変えてるし。

知り合いが見なきや、私がモデルってわかんないですよ。

「少しだけ甘えた声で、拗ねた様子で。」

主人公があまりにも申し訳なさそうにしているので、可愛くて、からかいたくなったの  
で」

まあ確かに『教えてくれたっていいのに』とはちよつと思いましたがけど……」

！ やっぱり淋しい気持ちにさせてた！  
わたしってば、なんてダメな彼女なんだ……！

主人公、その言葉にガーンと衝撃を受け、再び思いっきり頭を下げると、猛烈な勢いで謝罪の言葉を述べる。

### 〈主人公〉

「そうだな！ わたしがなーの立場でもそう思うよ。

本当にごめんな。なーの言う通り、話すタイミングなくしちゃってただけなんだけど。それでも、いい気持ちじゃないよな。

我ながら可愛く描けたから、勿体なくなっちゃって。

つい出来心で投稿しちゃったんだよ。本当にごめん。

……だけど、そんな感じだから、このアカの事はマジで誰にも言っていないんだ。

もちろんすうとかも知らないぞ！

……とにかく。ほんとにごめん。

このお詫びっていうか、埋め合わせは必ずするから！」

そうだ。半年前、主人公は『この人を絶対に幸せにする』という強い決意のもと、七緒

と交際を始め、今日に至る。

なのに、今回はそれに反する事をしてしまった気がする。

だから主人公はとにかく、とにかく謝りたかった。

もしこの罪を今から挽回できるなら、なんだってしよう。そんな気分になっていたのだ。

●正面 15センチ

「【嬉しそうに。】

もちろん、埋め合わせしてもらうつもりはない。それには及ばないので。

だが、主人公がこんなにも真剣にこの件を捉えて、誠実な対応をしてくれた事自体は、とても嬉しいので」

えー？ 埋め合わせしてくれるんですか？

【穏やかに優しく。そんな主人公の人柄が好きだなあと思ったので】

ふふ。いいのにそんなの♡

【甘くからかう。】

七緒自身は『この程度の事、特に謝る必要はない』と思っている。

しかし、主人公の性格上、何かお詫びをしないと気が済まないだろうと気づいたので】

先輩かわいー♡

でも、折角（せっかく）ですから、お言葉に甘えちやおうかなあ？」



〈主人公〉

「おうおう。何でもさせてくれ。

セーラちゃん絵の百枚ノックでもいいぞ！」

主人公、前のめりで頷くと、ふんふんとファイティングポーズを取る。

百枚はちよつと時間がかかりそうだが……七緒の気が済むなら、その位喜んで書かせて  
いただくつもりである。

だが……。

● 正面 15センチ

「ちよつとぎよつとして。

まさか、主人公がそんな事を言い出すとは思わなかったのだ。

本音を言えば七緒にとって『セーラちゃん絵の百枚ノック』は非常に魅力的である。  
しかし『さすがに罪に対して罰が重すぎるだろう』と思い、やめておく」

お詫びの絵？

「ちよつとコミカルに。『うーんうーん』とうなって。

『実に悩ましい。主人公のイラストのファンとしてはぜひイラストを描いてほしい。だ

が、それは罰として適切ではない』という事を強調して、辞退する」

んー。それはすごい魅力的ですけど。

そこまでしてもらっちゃうのはなあ……。。

【少し間をあけてから。

ふと思いついたように、嬉しそうに。

『実質お詫びにはならないお詫び』を思いつく。

どのみち今日は、これからセックスするつもりだったので」

あ♥

じゃあ。おしおきしたいです♥」

〈主人公〉

「……………えっ……………♥」

しかし、主人公の刑罰は、ここで唐突に決定した。

しかも『おしおき』という言葉を用いている割には、ずいぶんと甘い響きをもって。

〈主人公〉

「……………？」

七緒、目を細めて主人公を見やる。

正面から捉えられた主人公はドキツとして、まるで蛇に睨まれた蛙みたいに動けなくなる。

しかし、これも妙なたとえだ。

動物にたとえるなら、主人公は森のゆかいなおともだち系アライグマで、七緒はそこに舞い降りた、美しき白鳥のような存在なのに。

……でも、蛇にたとえるのもアリかもしれない。

七緒は蛇顔ではないが、身体が細くしなやかな所とか、ちよつと執念深い所や、ミステリアスな雰囲気があつて『蛇っぽい』ともいえる。

そうだ。ヘビ七緒のなら、カエル主人公は食べられてもいい……。

などと考えていると、七緒がまた主人公の右耳に唇を近づけてくる。

ひそひそ話をする必要なんてまったくないはずなのに、わざとそうしてくる。

SE 4 七緒が、主人公に密着する音

【最初から最後まで流す】

七緒、主人公の右耳にささやく。

★右 ささやく 0センチ ※マークのセリフまでささやく

「『ひそひそと、ゆっくりと。』

主人公がこんな風に『えっちな事をされながら、それを言葉でいやらしく解説されるシチュエーション』が大好きな事を知っているのだ。

この状況を楽しみつつ、最大限主人公の耳を楽しませ、ドキドキさせようとしている」  
こんな風に横からくつついて。

おっぱいと太もも。先輩にびったり押しつけて」※

SE5 七緒が、主人公の内腿を触る音

【最初から最後まで流す】

★右 ささやく 0センチ ※マークのセリフまでささやく

「『ひそひそと、ゆっくりと。』

主人公の右の太ももの内側を、いやらしく触りながら話している。

主人公がこんな風に『えっちな事をされながら、それを言葉でいやらしく解説されるシチュエーション』が大好きな事を知っているのだ。

この状況を楽しみつつ、最大限主人公の耳を楽しませ、ドキドキさせようとしている」  
こんな風に内腿（うちもも）、さわさわしながら……。

先輩の大好きな」※

七緒、主人公の右耳を舐める。

☆右 舐める 0センチ

「【不意打ちで、でも優しく舐める。

右耳の穴の入り口に舌を挿入し、小さく動かすイメージ】

びちゃっ……♡ ちゅぷっ。びちゃっ……♡

【ゆっくりと、ねっとりとした動きで、音を立てて舐め、それから舌を離す。  
露骨にいやらしい音を立てる事で、主人公をドキドキさせようとしている】  
れーろっ♡」

〈主人公〉

「！」

七緒、主人公が露骨にびくっ♡ としたのもかまわず、続けて右耳にささやく。

★右 ささやき 0センチ ※マークのセリフまでささやく

「くすくす笑って。しれっと。」

まるで耳舐めしていた瞬間などなかったかのように、言葉を続ける」  
お耳ぺるぺるしてあげるんです♥  
それで。先輩が

【『嘘喘ぎ』する。

わざとらしく、いかにも作り物じみた喘ぎ声を出す】

『あっあっ♥ あっあっ♥』

【しれっと元の話し方に戻る】

って恥ずかしい声出して。

『やめて』ってお願いしても絶対やめてあげない、

【ゆっくりと。ひときわいやらしく、ねっとり。】

主人公が最近この『快樂漬』という言葉をとて気に入り、強い反応を示す事を知っているので

快樂漬（づ）けえっち。

してあげたいなあ……♥

ふふふふ♥」※

〈主人公〉

「あっあっ。あ」

……もうダメだ。

ドキドキしすぎて、座席から見える景色がぐるぐる回転して見える。  
主人公の頭は、完全におかしくなってしまった。

〈主人公〉

「な、な………♥

ここ、どこだと思ってるんだよ………♥

フードコートだぞ………♥

そんな事言って。誰かに聞かれたらどうするんだよ………♥  
」

主人公、足をもももぞさせながら、慌てて注意する。

だが、声はあからさまに嬉しそうに震えており、落ち着きは完全にゼロ。

おまけに、はあはあと甘い呼吸を漏らしているものだから、まるで説得力がない。

●右 0センチ

「『あまあまに優しく。『そんなの気にしなくて大丈夫ですよ』という感じで」  
んー？

大丈夫。誰にも聞こえませんよ。

他の人からはね。

女の子が二人。ベタベタしてるようにしか見えません♪  
でもね？」

七緒、主人公の右耳にささやく。

★右 ささやき 0センチ ※マークのセリフまでささやく

「『ひそひそと嬉しそうに。』

一見『妙に距離の近い友人同士』にしか見えない自分達の実態を述べ、主人公を興奮させようとしている」

ほんとの私達は毎日やらしい事してる変態カップルで。

先輩は私にいじめられるのが大好きなDMさん♥

いけない事して。これからおしおきされちゃうっていうのに。  
もうこんなに期待して。



※ 『今日はどんな事されちゃうんだろー♥』って、はあはあ興奮しちゃってるんですもん」

〈主人公〉

「あ……。 あっ……。 あっ……。

それはっ……。♥」

● 右 3センチ

「くすくすと嬉しそうに」  
「違います?」

主人公、恥ずかしすぎて、期待しすぎて、荒い息で目を潤ませる。  
それを、横から七緒がニヤニヤ見つめている。

これだけで想像力豊かな主人公は、今日これからの自分達を想像した。  
それは、自分が七緒にめちやくちやに犯される未来だ。

容赦なく、初手から完全に封じられて。

なすすべもなく喘ぎながら、何度も何度も絶頂させられる未来だ。

……。そんなもの、一刻も早く迎えたいに決まっている……。

だから、今すぐ七緒の家に行って、続きをしてほしい。  
もう、それ以外の事なんて、一つも考えられない。

だから、主人公は……黙って首を振る。

● 右 3センチ

「くすくすと嬉しそうに」

ふふ。違うんだ♡

先輩は素直で、とっても悪い子ですね♡

じゃあ、ほんとはこのまま触ってあげたい位なんですけど……」

七緒、さらに近づく。

すでにとくにノックアウトされている主人公を、なお攻める。

● 右 0センチ

「あまあまにわざとらしく、残念そうに」

ここじゃあ無理ですから」

七緒、主人公の右耳にささやく。

その時紡がれた一言で……主人公の理性は、形を保っていられないほどにとろけた。

★右 ささやき 0センチ ※マークのセリフまでささやく

「ひとときわいやらしく、あまあまに、わざとらしく。

主人公をめちやくちや期待させたいので」

うち帰って。しましょつか……♡」※

ここでフェードアウトして終了。